



ラッキーナスビ2.5



仕事に行ってきました!!

仕事の体験

2年生が職場体験学習

選ばなかった職場体験先

今週、2年生の生徒たちが職場体験学習を行った。今回の職場体験学習には、たくさんの方が選んでくれた。今回は学年主任・吉田健太郎先生から、生徒たち一人一人に「出向辞令」が手渡された。生徒たちは自分たちの興味や希望とは関係なく、体験先の職場を言い渡されたのである。

ここには、昨年度の学年主任・中嶋康尋先生のある想いが込められている。それは「自分の可能性は、そのときの環境に適応しようとする事によって開かれていく」という想いである。今まで体験したことのない環境（職場）に身を置く。そこで、今まで体験したことのない仕事をする。そのなかで任せていただいた仕事をなんとかやり抜こうとする。そのときにはじめて、自分の中に隠れていた可能性が顔を出してくる。「自分にはこんなことができたんだ」と、今まで自分も知らなかった可能性に気づくことができるようになる。このような気づきが職場体験学習ではたくさんあったはずである。

中嶋先生が思い、吉田先生が込めた「出向辞令」が、生徒たちの未来をひらく「チケット」になるかもしれない!

内田樹さんは『待場のメディア論』(2012年、光文社)のなかで、次のように語っています。

みなさんの中にもともと備わっている適性とか潜在能力があって、それにジャストフィットする職業を探す、という順番ではないんです。そうではなくて、まず仕事をする。仕事をしているうちに、自分の中にどんな適性や潜在能力があったのかが、だんだんわかってくる。そういうことの順序なんです。

みなさんはまだ学生ですから、自分にどんな適性や潜在能力があるのか、知らない。知らなくて当然なんです。知らなくてもぜんぜん構わないと僕は思っています。自分が何に向いているか知らないままに就職して、そこから自分の適性を発見する長い旅が始まるんです。(p.18)

戦い抜いた中総体

地区大会、終わる

3年生にとって最後の大会となる中学校総合体育大会（地区大会）が終わった。各部とも、これまでの練習で積み上げてきたものを発揮し、最後まで戦い抜いた。

この地区大会に臨むにあたって、校内で開かれた選手推戴式では、多くの部活動のキャプテンが「感謝」という言葉を使いながら意気込みを語っていた。チームメイトへ、先生へ、保護者へ、ラバルへの様々な「感謝」が熱い想いとともにも語られていた。

部活動に限らず、感謝するという行為は、これまで自分を支えてくれた人たちに想いを伝えることでもある。感謝できればできるほど、自分が自

分だけの力でここまでできたわけではないこと、実に様々な場面で回りから支えてもらっていたことに気づくことができる。「感謝すること」は、周囲の人たちと手を取り合って生きていくためのキーワードである。

これまで自分を支えてくれた人たちに想いを伝えるために、「もし〇〇がいなかったら（なかったら）、▼だろ」という発想を習慣づけていくのはどうだろう。思いつくだけの人や出来事を〇〇に入力し、▼を考えてみる。この▼に入る内容が、自分にとって「望ましくないこと」であればあるほど、〇〇に入力した「人」や「出来事」の大切さを実感できる。「もしチームメイトとの競争がなかったら、こんなにレベルアップすることはできなかったら」「もし〇〇さんの一言がなかったら、最後まで頑張りぬくことはできなかったら」等々。

戦い終えた今だからこそ、自分を支えてくれた人たちへ想いを伝えてみよう。戦いは終わっても、思考は続く。思考が続けば、新たな戦いを始めることもできる。「感謝」に想いを伝える発想法を「ナスビの売り方」に加えてみるのはどうだろう？

感謝

